文部科学省
平成17・18・19年度　人権教育総合推進地域事業

だれもが安心して豊かに生活できる
学校をめざして

地域と共につくる多文化共生の学校

平成２０年３月　横浜市立上飯田中学校
上飯田小学校
いちょう小学校
飯田北小学校

4校全体での　年間の主な取組

1．研究主題

『だれもが安心して豊かに生活できる学校をめざして』
—地域と共につくる多文化共生の学校—

2．研究主題設定の理由

研究主題『だれもが安心して豊かに生活できる学校をめざして』は、横浜市教育委員会が平成１３年に教育長通知として発信した人権尊重の精神を基盤とする教育の推進に関する文章で、横浜市立学校のあるべき姿を示している。

上飯田地区４校では、多くの外国人児童生徒が在籍しているという実態をふまえ、教育長通知を次のように解釈し、一人ひとりの課題を見つめ、課題の解決に向けた取組を行っている。

『だれもが』　日本人児童生徒も外国人児童生徒（外国籍および外国につながる児童生徒）も
『安心して』　国籍や民族の違いによって、いじめられたり、差別されたりせず
自らのルーツに自信や誇りをもち
『豊かに』　自己肯定感をもって、思いや願いを実現していく

こうした学校づくりは、学校独自の取組だけで達成されるものではない。多くの外国人住民が住む上飯田地域が一体となった取組を展開することで、より確かな効果が期待される。そこで上記の主題を設定し、地域と共に研究を推進することとする。

＊外国につながる児童生徒：二重国籍者、日本国籍取得者および保護者などが外国籍である日本国籍者など
（平成15年度横浜市学校教育目標より）

3．組織

4．主な取組の様子

研究の重点
- A 進路・学力保障、アイデンティティの確立の取組
- B 異校種間の連携
- C 地域や公的機関との連携

A ４校児童生徒交流会

「４校の中にはいろいろな外国人児童生徒がいる。自分の学校には少なくても、地域には仲間がいるんだ」と安心して過ごせる子どもたち同士のつながりをつくるために平成11年より多文化共生に関わる取組を４校の持ち回りで行っている。地域からの関心も高まり、保護者の参加・参観も見られるようになった。

A B ４校授業交流会

小中合わせて９年間の縦のつながりで子どもたちの成長を見守っていこう、育てていこうという趣旨のもと平成16年から始まった。中学校への参観では育てた子どもたちの成長を見取ることができ、小学校への参観では、これから入学してくる生徒の学習や生徒指導へのヒントになる情報を得る有意義な場となっている。

B ４校連絡協議会

４校が協働して外国人児童生徒の受け入れ体制を整え、課題の解決を図ることを目的として、平成10年に発足。校長、人権教育担当、国際教室担当が、月一回程度会合を開き、活動の計画や検討、情報交換を行っている。

C 人権教育推進地域校 泉ブロック運営委員会

４校連携の実績をふまえ、地域に多く在住する外国人の課題解決を図り「共に学ぶ学校づくり」をめざして「人権教育推進校地域事業」の委嘱を平成13年に横浜市から受けている。泉ブロックとして、年２回、運営委員会を開催している。

C いちょう多文化共生交流会

平成３年、「中国からの帰国者とその家族、外国籍居住者との交流会」を開催し、食文化の交流、意見交換を行い、お互いを認め合う交流会となった。その後、平成14年から泉区主催の「国際交流まつり」に合わせて開催した。
平成17年からは会場を団地に戻し『いちょう団地多文化共生交流会』として、日本人住民と外国につながる住民が安心して生活するための交流をしている。

A B 定時制高等学校の見学

高等学校との連携の延長として、上飯田地区から進学が多い定時制高等学校の見学と情報交換会を平成17年より始めた。上飯田地区を巣立った子どもたちの状況を確認するとともに、支援の連携について情報交換を行っている。

B C 泉ブロック拡大委員会

泉ブロックの拡大の取組として、４校全職員と保育園・幼稚園、高等学校、行政、地域ボランティア・支援団体等との情報交換会を年２回開催している。「上飯田地区の多文化共生の挑戦」と題し、各回にテーマを設定して講演やグループディスカッションを設け、情報交換を行っている。

A C 親子の日本語教室

平成12年より、神奈川県インドシナ難民定住援助協会（現「特定非営利活動法人かながわ難民定住援助協会」）による『子どもの日本語教室』が開催され、平成14年からは文化庁の委嘱を受け『放課後の日本語教室』に加え『親子の日本語教室』が開催された。現在は年３期にわたって『親子の日本語教室』が開催され、インドシナにつながる多くの親子が学んでいる。

５．成果と課題

進路･学力保障、アイデンティティの確立の取組

【成果】 ４校児童生徒交流会は、毎年４回ずつ実施している。児童生徒がなかよくふれあう・多文化に親しむ・中学校への期待を膨らませる等のテーマを毎回設定し、年々充実してきている。

また、講師を招いて学習したり、民族衣装や楽器に触れる機会等を設けたりして、多文化共生を中心にした人権教育を進めてきた。子どもたちは、様々な国の文化に関心をもち、違いを認め、共に生活するよさを楽しんでいる。

【課題】 外国人児童生徒が自らのルーツに誇りをもつためや親子間でのコミュニケーションが円滑に行えるためには、母語を保持していくことも大切となる。今後も、日本語の指導はもちろん、母語が学べる環境を地域として整備していく必要がある。

外国人児童生徒の学習言語としての日本語の定着、基礎学力の充実・向上を図るために、個に応じた支援、放課後や長期休暇中の学習支援等の学力の保障をすすめてきたがまだ充分とはいえない。さらに充実させるために、指導法や教材の開発をすすめていく必要がある。

異校種間の連携／地域や公的機関との連携

【成果】 幼・保・小・中・高等学校等の縦の連携と共にそれぞれの発達段階で学習支援や生活適応支援などに関わる地域ボランティア・支援団体、大学からのアドバイザー公的機関等との横の連携も図ってきた。子どもたちの成長を多くの人々によって広く長く支援するためのサポート体制が整備されてきている。

また、上飯田中学校区のＰＴＡが中心となり、保護者や地域に対して「多文化に触れよう」、「多文化共生を考えよう」と呼びかけをし、料理教室や講演会等の具体的な活動が見られるようになってきた。学校から発信した多文化共生の推進が、保護者や地域に広がっている。

【課題】 地域や保護者と連携した人権教育・多文化共生教育の取組が計画的に行われるようになったが、地域全体には広まっていない。地域の連携を活かして、関心をさらに高めていきたい。

異校種間の連携が深まったが、通訳者や翻訳物の共有化が進んでいない。今後は、配布物のライブラリー化や、通訳・翻訳者のデータバンク作成等、ソフト面での連携を図っていきたい。

各学校での取組とホームページのご案内

横浜市立上飯田中学校

http://www.edu.yokohama.jp/sch/jhs/kamiiida/

上飯田中学校は、約半数の生徒が、２つの団地（上飯田団地・いちょう団地）から通学していて、外国人生徒が多く在籍している。母語が日本語でない生徒が全校生徒の２割以上になる現状から、「外国人生徒がいるのが自然」という感覚である。現実には、生活習慣の違い、日本語によるコミュニケーション不足などの理由から、様々な課題を抱えている。そのため、学校として多文化共生教育に力を入れ、個に応じて、個別授業や少人数授業、放課後も、ボランティアの方々の支援をうけ、日本語学習や余暇支援などを行っている。

横浜市立上飯田小学校

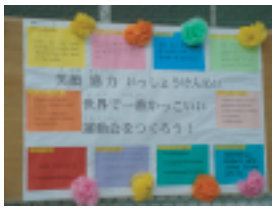
http://www.edu.yokohama.jp/sch/es/kamiiida/

上飯田小学校は『挑戦・夢・ふれ合い　まちにひかる上小キッズ』というキャッチフレーズのもと、「まちに開かれた学校づくり」を行っている。「挑戦」とは、自分のよさや可能性に気づき自らの意志で行動すること、「夢」とは、感動する心を大切にし、より豊かに生きようとすること、「ふれ合い」とは、地域社会の中で自分と人々のかかわりを見つめ、共に生きようとすることと捉えている。本校は他３校に比べ、外国人児童は少ないものの、多文化共生教育の重要性と地域の特色を考え、外国人児童が自らのルーツに誇りをもちつつ日本で生きていけるようにすること、他の児童に相手の立場を尊重する意識を育成することという二つの視点をもって、多文化共生の学校づくりをめざしている。

横浜市立いちょう小学校

http://www.edu.yokohama.jp/sch/es/icho/

いちょう小学校は境川を市境に大和市に隣接する横浜市の最西部に位置する神奈川県営いちょう上飯田団地の中にある。中国帰国者家族やインドシナ難民の呼び寄せ家族等が多く在籍し、全校児童２０３名中、１１７名（平成19.5）が外国人児童である。日本人児童も外国人児童も安心して生活できる多文化共生の学校をめざして多文化共生を盛り込んだ授業や校内表示等に取り組んでいる。



横浜市立飯田北小学校

http://www.edu.yokohama.jp/sch/es/iidakita/

飯田北小学校は、明治６年に「飯田学舎」として設立され、その後中和田小学校北分校、上飯田小学校北分校、いちょう小学校北分校となり、昭和５４年飯田北小学校として開校した。

９カ国の児童が共に学ぶ国際色豊かな学校、情報機器・システムを活用し学ぶことができる学校、自分たちの手で作物を育て、食することのできる学校である。

このような学校の特色を生かし、「豊かなかかわり合いを通して、共に学び共に生きる喜びを感じられる子どもの育成」をめざし、研究を進めてきている。